

最優秀賞の「翼」は、大学受験を控えた高校三年生、美羽の日常を綴っています。無理な背伸びをせず、等身大で描かれた物語であるという印象を受けました。読者は作品のなかにずっと自然に入りこみ、共感を抱くことができるでしょう。ストーリー展開に派手さはありませんが、登場人物たちも背景も小道具もきめ細かに描写されていて、それが作品の精度を高めています。なにより主人公美羽の、自身と友人を見つめる「目」と「心」が丁寧に誠実に書かれているところがいいですし、美羽の気持ちを「翼」と「足」に象徴させてまとめたラストも爽やかで、最優秀賞にふさわしい作品だと思いました。

奨励賞の「そして川に落ちる」は、喧嘩の際に「お前なんか死ねばいいのに」と友人に言われ、そのあと川に落ちて死んでしまった「僕」の話です。そう言われたから死んだわけではないのに、友人は、「僕」が自殺したと思っています。「僕」は、成仏する前に友人に伝えなければいけないと思うのでした。違うよ、あれは事故だったんだよと……。

主人公がこの世とあの世の境界にいるという物語は、アレックス・シアラーの『青空のむこう』など、手本に適した作品が幾つもありますが、描き方は意外と難しいものです。あの世にいくまでの残された時間、生きている人間に姿が見えるか見えないか、などのなかでの約束事をきちんと設定しないと、矛盾だらけの作品になってしまうからです。その点、この作品は、不備がないとは言えませんが、なかなかよく考えられていると思いました。

最後の「僕」と友人とが会話を交わすシーンでは、言葉が少しそっけないため、物語としての盛り上がりには欠けるのが惜しいです。しかし、不意の死という重くなりがちな話を、気負わず、さらりと描いていて、その素直でユーモラスな筆致から滲み出ているあたたかさ、かえってほろりとさせられました。

おなじく奨励賞の「ふたり。」は、高校一年生の女子二人の物語。母を亡くしたばかりの皐月は、体育祭で同級生の夏樹と二人三脚を組むことになります。夏樹は皐月よりずっと積極的で明るく、友達も多い女の子です。けれど皐月は夏樹の笑顔のなかに、哀しみの影を見つけるのでした。夏樹は数年前に、双子の妹、夏菜を亡くしていました。夏樹の母は死んだ夏菜のほうを愛しており、以来心を病んでいます。そこで夏樹がとった行動とは……。

文章はたどたどしいところもあり、表現力も構成力もまだまだですが、「こういう話が書きたい！」という思いが強く伝わってくる、心にのこる作品でした。作者は中学一年生、この先が楽しみです。タイトルの「ふたり。」には、皐月と夏樹、双子の夏樹と夏菜、そして夏樹と母、皐月と母、と幾通りもの意味が含まれているのでしょう。

10回目を迎えた文学コンクール。今年最終選考に残った作品は、例年にも増して粒ぞろいでした。どれも読み応えがあり、それぞれの作品から多くの可能性を、未来の光を感じることができて、たいへん嬉しく、また頼もしく思いました。